

機関誌



NO. 2

1959

機関誌 目 次 第二号

連帯感ということ	太田晋一	2
絆	内藤謙一	4
はたちの春 —成人の日に思う—	竹田敬司	5
大学教育と道義	眉 庵	9
繊維雑感	相宅省吾	10
共鳴現象	浜村保次	12
Sentiment driver	鈴木溪太郎	13
朝鮮に於ける合成繊維産業	朱 焯 暉	14
祖谷川	吉田 実	16
つんどく	辻 昭夫	21
闊 志	上野康男	26
登山はスポーツか	高橋 宏	28
卒業生の就職状況	K M 生	30
ナイロンの分解、重合、紡糸	3回生合成繊維実験班	33
Kodel Corval	山内敬司	36
四面体と八面体の折紙模型	小西恒男	37
積分反応その一	岩崎研究室	40
編集後記		44

連帯感ということ

二回生 太田 晋一

4回生の方々が卒業される今、おのれとうというべきでしょうが、ともかく私達にとって一つの喜びは、卒業される方々が夫々理想の感覚を身につけておられるという、羨望の入りまじった気持ちなのです。コンパや懇談会の席上で後輩の私共に希望や意見を述べられる諸兄の内、この理由では恐らく言えぬであろう理由からの確実さ、安定があることは類としい限りであります。繊維化学科に入った私達に幾度か言われた柔らかながらの向題、確かに少なかったのは事実ですがあったことと事実です。

多くの先輩の言われる「フアイトを持つ」ということ、一つは一つの感想一つの意見を述べたいと恐れます。「フアイト」とはここは「基本のつながり」の中に於ける充足感、一つの大きなエネルギーとして表わされる意識、又は何か事をやることとする強烈な意識」のことと恐れます。毛達もこの連帯関係の中に生きてゐるし、従つて誰でも連帯感ということ、で考える必要があります。所がその連帯感にしても、二つの現われ方、考え方、すべきかがあると思うのです。即ち個人の主体性をどこまで中心として現われる連帯意識とどう一つは集団の認識を根本的出発点としてその共に二つでの連帯感を把握するということとあります。この二つは必ずしも対立したものでありませんが、私にとって向題になるのは主として前者でありますので、ここで私の所見を述べたいと思います。ごく身近な例として反響というものについて考えてみますと、私が友人を求める場合には、単に彼との互の漠然たる共通意識を欲しているのではなく、私が自己の向題に深く入ろうとする時の意識が友人に於て同一の意識を発見する時はじめて確実な反響を感じる訳で、そこに於て彼と私との間に連帯感として把握さるべきものが生まれるのです。「大学で眞の友人は得られない」とはよく聞かれることですが、しかし如何にく親密な親友たりとも、生活の異なる場では屢々離れることがあるので、それ自体反響の眞のあり方だと私は思うのです。例えば今私にとって最も親密だと考えている友人はかつての親友ともなれば、卒業の最も親密

な友人でもないように思えます。一体何だつてく生涯の親友」という静止した固定観念にとらわれねばならぬのでしょうか。私はその持っている感傷的響きに辟易します。ある特定の場での共通な連帯感、これこそ唯一の友情成立条件ではないでしょうか。

一対一の友情関係のみならず、一対多の場合に於いても同じことが云えるのではないかと思うのです。私達は慢然と繊維化学科生としてのつながりを求めている訳ではないし、これだけの人が居るから、正にその理由で連帯感が必要である訳もないでしょう。同じ科のみならず、学部内のつながりの向題にしても、抽象的な「結集したエネルギー」や「ファイト」だけでは一向に私達にピンと来ないのは、それが私達自身の意識と一致しない場合を無視されているからです。私達に連帯意識が必要なことはいうまでもありませんが、もつと具体的にファイトと連帯感とを結びつけて言って欲しかったと残念に思います。オー“皆にファイトがない”“なつとらん”といわれても、私達は、はあそうですか、確かにそうですよねというだけで、まるきり私達と別のことを言われているような気なのです。要するにそれは個人の意識の向題ですから。

ファイトが事をやろうとする強烈な意識であるとするれば、私達にファイトがないということは、何故私達がその情熱的意識を持ち得ないかという向題に触れざるを得ず、その外的条件を抜きにしては考えられないことです。この点が重要だと思うのです。何故人は孤独なのかという向題に対しては、孤独そのものの現実を認めようとする代りに、尤もらしい理屈で孤独なんて赤傷にすぎない、そんなものは捨ててしまえ、とすぐこう来るのが常なのです。根本的に疑うことと、実在するものをしっかり見つめることによつてはじめてよりよい方向に進むことが可能になります。

言ってみれば、私達はお互に隔絶された個人の主体性の中に生んでいます。同じクラスの中でも、皆馴染んでいるようで実は内的なつながりということになると非常に少ないのではないかと思えるのです。多くのキツカケが必要になります。それによつて私達が確実な連帯感を持つようにならない限り、「ファイト」はいつまでも宙に浮いた言葉となるのではないのでしょうか。自治会、クラブ、懇談会、etc. はキツカケという意味で参加すべきことになつて来ました。要はファイトが私達を駈り立てるのではなく、何物かをすることによつてファイトの意識が生れるのです。機関誌の意味と、私達の共通の話し合いの一つの場として生れ、連帯感の把握を目標しているのだと思うのです。

絆 (キズナ)

濱村研究室

内藤謙一

僕のような若輩が絆とか、人間の結び付きとか生意気な事を言えた柄ではないが、齢三十を超えて恣々感じ出した事を少しく述べてみたい。

中野重治という人がある小説の中で、自分として今一番警戒したいと思つている事として、きれいごとへの誘惑という事を云っている。万般なく説明すれば人は納得するだろうと思ふ事は実は逆なのであつて、そう思ふ事に依つてこっちが気楽になるからである。

はなつまみされるほど一方的に頑張ること、そこに非常に美しいものが生れるらしい。

此の言葉は、僕にとって真に痛い。それはつまり人間と人間との結び付きに於ては、ねばっこくあらねばならぬという事である。何と人間関係に限つた事はあるまいが、特に人間関係においてはきれいごとを警戒すべきであると思ふ。「しっこい」という言葉は日本人の特にいやがる言葉だと思ふが之が欠けている為に、物事に徹底せずに中途半端な処で打切る事が多いのだと思ふ。しっこく喰い下る、ねばっこくまつわりつく。

そこからストラックルネと移つてゆく。その中から生れて来るものは、良きにつけ悪きにつけ、当らずさわらずのきれいなことと濟すよりはましな言である。

之はつまり、そのものの執着であろう。激し、気着、とことんまで追い詰める態度、之は我等等からみればどう云われるものか知らないが、僕は一つの人間の魅力であると思ふ。ひようひようとした、花れきつた人格と確かに一つの魅力である事に違ひはないが、その全生活を通じて所謂何の結晶したものと無いという事は、淋しき限りであると思ふ。

まことに苦しい事ではあるが、人間同志が互いに愛し合い、互に傷つけあつて、そこから人間の絆が織りなされてゆくのであつてみれば、ねばっこい人間関係こそ人間の歴史(少し大げさかも知れないが)に参画するものと云うべきであろう。

6 : 7, 22, 37, 51
7 : 1, 11, 21, 31, 41, 51
8 : 1, 11, 25, 37, 54
9 :
10 : 7, 24, 37, 54
11 :
15 :
16 : 2, 24, 39, 56
17 : 7, 14, 27, 37, 44, 57
18 :
19 : 7, 24, 37, 54, 24:
20 :
21 : "
22 : 2, 26, 42, 21, 12,
23 : 2, 22, 42, 52, 42

はたちの春—成人の日に思う—

竹 田 敬 司

マスコミにおだてられたわけではないが、成人の日を迎えて、ある意味で感慨無量である。

選挙権は得たが、政治にあいそをつかして棄権する人が多いそうであるが、それは政治を狭く見て、政治家の考えた諸々の政策によって自在に社会が動かされるかのように考え、政策そのものは社会の諸関係の表面的形態にすぎないことを見落し、社会を根底から考える態度と意欲が欠けているからである。これとは全く別の意味に於いてだが、自分なりに投票の価値を疑わずにはいられない。何故なら、「清き一票」は「空りき一票」だから。大穴のあいたバケツに一滴一滴を注いで水面を高めようとするようなものだから。「大穴」とは、何百万という「考えない一票」「根拠のない充入観にとらわれた愚票」「偽善的な票」のことである。だからまじめに学び考えた結果の「清き一票」と「誤差の範囲内」であり、気安めにすぎない。然し 157万人の我々は、何につけても共通の地盤に立つ可能性大であり、お互いに青年としての連帯意識を以って、裸で学び考え話し合うことが、他のどの年代よりも可能であるし、又「科学する心」の最も旺盛な時であるので、孤立した「チリ」が手をつないだ「山」となつて、バケツの水面を高めることが出来るであろう。

ラジオが我々を「日華事変っ子」と呼んだ。昭和13年、チヨウチン行列が記憶にある由もないが、我々はあの激動期の始まりに人生を強いられたのであつた。16年12月8日の「臨時ニュース」「紀元2600年」の歌声、学徒動員の時の東條首相の激励演説、あの不気味極まりないサイレンの連鳴、等々の生々しい録音は、再び社会が激動しはじめためまぐるしい今日、20才を迎えた者の感涙をもよおさずにはおかないのである。

我々は、物心はついていながつたが「戦争を知っている世代」である。戦争をロマンチックに考えるより若い世代と異り、我々は無心ながら、昼だというのに真黒な空一ぱいに火花が流れ、緑色の消防車が疲れ切つたように止

つてまのぬけたようにサイレンをまわしていたのを覚えている。戦争映画の一種独得なおもしろさや戦争ごっことはおよそちがった現実であつたことはたしかである。参謀本部や、田舎の別荘に住む人間共には、戦争はゲームであつたかもしれないが、パイは血のかよつた人間であつた。赤紙一枚でどうにでも動かせる権力という鎖でつながれた奴隷であつた。

戦争に生れ、戦争と共に育つた我等“事変っ子”には、とすれば、戦争という社会状態が、あたり前のことのように見え勝ちである。然し厂史を通観すれば、これはまさに異常な激動の時代であることが分るのである。人間の頭脳は、かかる現実を、単なる現実として見過すことの出来るほど下等なものではないはずである。自然界にしる、社会界にしる、不思議な現象があれば、何とかそのからくりを知りたいと欲するのは万物の霊長の本能であり、以つて科学の生じる所以である。いわんやこの戦争の問題は、吾人生活の根底までもゆすぶる切実で現実的な大問題である。何故なら、人間は社会的動物だからである。平和の問題が世界の最大関心事である今日まなおさうである。世間には、「どうしようもないではないか」という悲観論があるが、いやしくもこの言葉は20才の発すべきものではあるまいと思ふ。運命論は科学する意欲の敗北するところである。一たび争が起ると、直ちに重産化する化学工業を目ざす我々には、これは切実な問題でまなごころうか。「戦争はもう結構、いやだ、いやだ」とただをこねるばかりで戦争を避け得るわけがない。何千万というキリスト教徒が祈つてと、二隻も参事がくり返されたではなかつたか。ただ神に祈ることによつてのみ平和が得られるものなら、そういう奇蹟が起るなら、これは世界の七不思議の一つに数えられて然るべきだろう。流石の神さんも厂史の流れには全くお手エグのようである。観念論的世界観は、もはや完全に誤謬であることは、まよりに厂史そのものが暴露している。要するに戦争の原因を科学的に、究極までつきとめることが、何よりも要求されるのである。

ところで、あのような現象が20年をまたずしてくりかえされたということが、単なる「厂史の偶然」であつたならば、これ又世界の七不思議の一つである。又単なる戦い好きの軍人の個人的意思や野心によつて起されたのではないことも厂史によつて明確である。厂史における個人の役割は、それが厂史的に与えられた諸条件によつてのみ可能である。世間では一般に、戦争回避を政治家の「良心」にうつつたえる傾向があるが、個人的意思そのものが社会的、厂史的な物質的諸条件によつて規制されているのである。戦争の原因は、個人の「精神」に求めるべきでなく、社会的厂史的なものに、即ち「物

質」に求めるのでなければならぬ。このことも先入観なしに歴史をながめれば、直ちに明らかである。この点を特に強調したいのである。又、戦争は力の均衡によって防げる、という俗論が横行する。ある程度、現象的にはそうかもしれない。しかし今我々は、根本的に戦争の必要と可能性をなくすることを考えるべきである。上の見解は、暴力団の力の均衡を例に上げる以外に、何の根拠も上げることが出来ないであろう。これは、軍拡競争を弁護する極めて反動的な偽善である。

かくて我々は社会の根本に注目せねばならない。今ここで歴史の本質を考えることは出来ない。それは諸古典的文献をじっくり読めば理解出来ることである。今問題なのは、我々のとるべき“方法”と“態度”に因してである。さてあの龐大な戦争という現象は、実にこんとんとしたものである。一たん開始されたが最後、あとは手のほどこじようもない破壊から破壊への連鎖反動的拡大である。破壊のための生産、一体人間は何をしているのか、つかみどころもない消耗戦なのである。戦争文学には(戦争にかこつけて恋を謳くハリウッド・ムービーは論外として)この戦争の無意味さをついたものが多い。歴史学とは、諸戦斗と戦況の変化とを記述するものではなく、その根底に存する原動力たる法則をたづねる科学でなければならぬ。このこんとんとした現象はその始まり以前にさかのぼらねばとうてい把握出来そうもない。直接の原因は国家対国家の、要求-拒否の関係から武力の行使、抵抗、という形式として現われる。即ち、中国に対する日本の「日滿支経済ブロック」要求を中国が拒否したことである。国境線というものを、古今永遠の自明のおきて、と考えるロマンチックな国家主義者は話し相手にならないが、我々はとうてい戦争の原因を、この単純な「国家対国家」という形式に帰して、「国家間の対立は人間の斗争本能の拡大で、不可避である」などという反動的、非科学的、観念論に満足出来ない。これでは何ら分析したことにならず、単に自然界の生物学を人間社会という別の法則に従う現象に機械的にはめこんだにすぎないからである。日本の中国がそれぞれ2人の人間ならいざしらず、その中に含まれる何千万の個人は、すべて個別的に共通の生物的人間である。日本と中国を分けるものは、“社会関係”に他ならない。又世間には「民族相互は相容れない」という、これ又反動的な見解がある。然し一体何処に根拠があるのだ？ 皮膚の色や言語や食物-----こんなものちがいがあの龐大な戦いの根本的原因であるということ、一体どうして証明しようとするのか？ それはただそういうことによつてのみ証明したことになっているのである。これはとうてい“科学的”といえないしろものでは

ないのである。次に又、民族間の理解によつて戦争は避け得る。と考へている“人格高潔なる良心家”がいる。「民族間の理解」こんな少女趣味的カテゴリーは、およそ本質から遠い、とるにたりない向題である。

本質は当然経済的諸關係に徹しなければつかめないであろう。この観点に立てば、戦争が“不況の解決”に他ならないことは見安き道理である。これこそ、眞に、科学的な根本的カテゴリーであろう。

不況とは何か？“過剰生産”である。即ち生産物があまつているのであるから、当然、国民は何不自由なく物質的生活を営めるはずである。だが現実には生産物があまればあまるほど、ますます多くの国民が飢えていくという結果になるのである。大東亜共栄圏が不況の解決を目的とし、これが同じ状態の他の経済ブロックと衝突して戦争が起つたのであり、しかも軍需が、不況解決にはたす大きな役割を考慮すれば、戦争回避のためには根本的に上記の大矛盾を分析研究し、解決しなければならないことは、先入観に毒されていない人々には、明白自明なる眞理であろう。この矛盾の解決は……これから先へ進むことは、旺盛なるファイトと、“自由なる魂”を以つて勇氣を以つて、眞実を徹底的に凝視する科学的態度を以つてすれば、たゆまぬ、まじめな勉強によつて可能なのである。

以上記した考察は、やつと成人したばかりの不勉強の青ニヤの見解にすぎないから、未熟で批判さるべきことであろう。だから上記のことは大した重要なことではないが、この文を書いている意図の核心ではないのである。成人の日にちなみ、ここに声を大にして強調したいのは以下のことにすぎない。そしてこれは断して正しい見解だと信じて疑わない。

「事茨っ子」である20才の我々にとって、今切実な向題といへば、就職向題と恋愛及結婚の向題、ということになっている。たしかに食つことが生きることの決定的な前提にはちがいない。しかし生命あつてこそ食えるのである。従つて直接、個人的基本的人権中の入権たる生存权さえも蹂躪する戦争をさけることこそ、さらにさし迫つた切実な向題であることは、科学的な物の見方をする人には見安き道理といわねばならない。「戦争などとう過去のことだ」って？、とんでもない。今、世の中は平靜であり、京の町は山々にかこまれて平和である。然し戦争の条件は平靜の時代の中に、いつのまにか出来上つていて、火花のちる時には、とはやどうにも手のつけようがなくなるのである。現に過去とまったく同じ種類の社会的経済的條件、即ち不況が存在しているのではないか。考へるべき時はまさにこの現在なのだ。毎日を安らかにのんびんだらりと送り、思想的な怠け者でいることはゆるされない。

自己の“自由であるべき魂”を偽って目をつむることは許されないであろう。戦争を避けるためには、この社会現象を科学的に分析し（このためには、さらに深く広く社会の根本的土台的構造、その歴史過程を貫く法則を学ぶことが要求されようが）その根本原因をつきとめ、進んでこれをとりのぞくための実践をすることは、20才である我々こそ、だれよりもなすべきオ一の学究でなければならぬし、又我々の基本的人権でもあるのだ。たしかに「学生は学生の本分をまもるべき」である。しかし実はこのことこそが、オ一の本分ではないだろうか。これこそ20才の春の課題であると信じる。

我等、“日華事変つ子”こそ、だれにもまして、この使命を持つ光栄ある世代でなければならない。

1959. 1. 15 — die Ende —

大学教育と道義

眉 庵

毎度申す様に、大学とは紳士を養成するところである。東洋流に申せば、君子を養成する所である。イギリスでも欧州でも乃至は明治以来の日本でもそうであった。アメリカといえども由緒ある古い大学ではそうであるに違いない。その為には道義の訓育というものが重要なファクターであると信ずる。

道義なんて古臭いものは廃れたものだから何でもよいじやないかという人もあるかも知れぬがとんだ間違いである。そんな考えでは事業をしても就職をしても商売しても決して成功しない。何となれば道義というものは裏返して云えば、信用に直通するからである。道義を無視する人はやがて信用を無視する人信頼し得ざる人である。大は国際間の処理、大会社の経営から小は町の小商人と雖も信用のない人では成立たない。少くとも長持ちしない。

人間である以上、誰しも自分が有利になりたいのは自然である。しかしそこには自ら限度がある。道義も何も振捨てて振舞う例は一頃の團列車の担ぎ屋である。しかしその担ぎ屋にすら仲間に対するきびしい信義がある。自分等の仲間クラスメートに対する道義すら無視するとすれば担ぎ屋にも劣ると言われても仕方がない。その人の事業が大きければ大きい程、その人の地位が高ければ高い程、道義性の要求の高い事を銘記すべきである。道義を重んずるといふ事は決して虚栄ではない。高い地位、大きな事業への必要條件である。

織 維 雑 感

相 宅 省 吾

「あの人工衛星オー号が打上げられた日、それをラジオニウスで聞いた瞬間、私達はあつと息をのみました。新しい世紀の頁がいまここに開かれたという壮烈な、そして厳肅な思いが、私達の心を包みました。しかし新しい世紀は人工衛星など花々しくないだけでじつはどし地球の上でいたる所ですさまじい唸をあげてはじまっているのです。

工場の中で汽車や汽船の中で事務所の中で今迄考えられもしなかつた機械や装置が、道具がつきつき働きはじめています。これ迄のものど全くちがったものいわば別の世界のものです。全く別の世界がこの地球の上に作られようといつて良いでしょう。

新しい世界がはじまるということは新しい暮が始まるという事です。たとえば人間が何かを嘗て暮すという事は多分どんな時代にも変らない事かと知れません。しかしその何かが突然変わろうとしているのです。

私達がこれ迄着て来たものは麻か木綿か絹か羊毛でした。種類こそちがつてもその原料はみんな天然繊維でした。その後に出て来た化纖と天然の繊維である事には変りなかつたのです。私達は天然の綿なるものに深い愛着があります。しかしこと着るものについてはさうさう綿なるものへの郷愁を捨てなければならぬときが来ているようです。これを考えさせ始めたのはあの「ナイロン」でした。こんど「テトロン」を着てみてこれがいよいよはつきりしてきたように思います。あの美しかった純綿や純毛にやさしくさようならを云う日が近づいています。私達の暮しが此所で大きく変わろうとしています」

以上が「テトロンを着てみて」[〃]「暮の手帖・47号・53頁 1958年(Winter)の冒頭の文章である。一般大衆の向から湧き上つた此のみずみずしい素直な感慨を讀んで、此の道に従事する我々の至らなさを痛感すると共に、吾人のみに許された此の新しい世紀の開幕への参加を祝福すると共に任務の重大さに決意を新にするものであります。

此の新しい世界がどのようにして開かれて来たのであろうか？ 其処には

他のすべての産業と同じく先人の苦斗に満ちた努力が積み重なっているのです。今迄幾度か云われているように、繊維産業も幾度かの革命を経て来た。古くは麻・絹の時代より、更に綿・羊毛の時代に、更に化繊が加わって人間の衣生活も徐々に多彩を加えて来た。しかしこの天然物に基礎をおいた此の産業は其の生産量又は製品の品質に一定の限界があり、無限の人類の要望に応ずる事ができなくなってきた。此の時人間は繊維の出来る秘密を解いたのである。その人の名はドイツのスタウデンガーとアメリカのカロツサー。此の開かれた知識はドイツ、アメリカの豊かな工業に育てられて6・66ナイロンとして開花して行った。ナイロンの躍進、絹糸の凋落と人々は只皮相な見方をしているが、之は繊維産業というものは其の基礎を農業より完全に工業に移った事を意味し、その影響ははかり知れないものがある。之を眞の革命と云わずして何を革命と云えるであろうか？

此の開かれた扉より新しい可能性が続々生れて来た。ビニロン・テトロン・オーロン等々、織らない織物、手のかからない衣、腐らないロープ等々、更に金属の分野に、木の分野に、土の分野に怒濤の如く進出している。そして此の十年間の歳月の湿い保護の下に幼年期を終えたこれ等の繊維は今や希望に満ちた少年期を迎えようとしている。

今、合成繊維のパイオニア・ナイロンの生長の跡を振り返ってみよう。即ち之が現われるや直ちに絹糸の牙城フルファッション靴下にとって変った。更にウーリ加工により全靴下が之に変わり、疲れ果てた母親の夜の労苦を一掃した事は記憶に新しいことであろう。更に吸湿加工、衛生加工の成功により止きを切つて全織物の分野に進出し始めた。之が産業界にはかつてこの威容を誇った天下の製糸産業会社は今やナイロンを加工する事により僅かに業績を保ち、あるいは、国民の血税によつてかろうじて消滅をまぬがれている状態である。

此の様な事態が再び他の繊維会社に波及しないであろうか。今やその原料を農業、牧畜業、林業より供給を受ける各紡績会社、毛織会社、化繊会社は製糸会社の失敗の後をたどらない爲に社運を賭して、その基礎を化学工業に転換し、此の産業革命に生き延びようと必死の努力を重ねている。

時代に適応出来る能力のあるものは栄え、無能なものは滅んでいくと云はげしい生存競争の嵐が今や繊維全体をゆりうごかしつつある。此の嵐は何日の日におさまるであろうか？ そして我々の衣料はどの様になって行くであろうか。之は楽しい空想の世界である。

例えば絹は繊維の女王であるという、尊大な老婆の迷信は、はつらつたる

少女達の足下より崩れ去って行き、重い、虫の食った英国製のオーバーは、斜陽貴族の日没と運命を共にし、明日をになう青羊の肩には、手のかからないセーターが輝き、坊く人のぼろぼろになった木綿の作業衣の代りに、雨にも、薬品にもまけない布がやさしく、堅固にそのからだを保護する事であろう。

その様な暁にはアメリカ南部の黒人は解放され、荒野をさまよう羊飼や、厳寒の極地で坊く樵夫は町に帰って文明の恵を樂しむ事が出来るであろう。其の上生とし生けるもの例えば蚕は自分のしとねで安んじて一時の仮睡を樂しみ、羊群には“いなば”の白兔の嘆なく、山には文字通り常盤の松の緑に覆れて、すべてその生命を樂しむユートピアを期して待ちたい。

共 鳴 現 象

濱 村 保 次

或会社の課長をしているうちの先輩が、何かの話の中で、「上役からこの向の向題はどうなったかねと向われるまで、いつけられたことに返事をせずに放っておくということは絶体にいけませんなあ、例えそれが出来ていても其の功績は半減するし、出来ていない時は一ぺんに『こいつはだめだ』となつてしまう」と云うことをいつて又「上役から命令を受けたら其の結果を向われる前に報告するのが認められるコツですよ、出来ないなら出来ないで向われる前に出来ぬ理由を言つて上役の意見を聞けばよい」と言ふ意味の事をつけたしたのであるが、この事は一寸聞くと、えらく上役にへつらっているみたいであるがとうでなくて仕事に対する一つの心構えの向題なのである。





私は、さすが苦勞しただけはあると聞いたのであるが、何故これをここへ持ち出したかという、こういう心構えは学生時代から身につけておかぬといざという時に出て来ぬし、又、現在学校でとてとてとてこういう具合には行われていないからである。

仕事のこと「こうしてみたらどうかね」といつてもやってみたのやら、出来たのやら出来ぬのやらこつちが再びたずねるまで一週間でも十日でも何の音沙汰がない場合が多いのではないだろうか。

これは学校だから見逃される場合もあるが社会では絶対許される害のもの

でない。これは仕事への本質的な心構えの問題であるからである。

人間は何でも行き過ぎをやらかす、例えば全体主義と云うと個人の価値などは零に等しく考えぬと気がすまぬし、民主主義と云うと極端に個人の殻に入ってしまったがる。どこまでも人間は厄介極まるものである。ほんとの社会の姿は私共の考えでは丁度化学の共鳴現象のように全体主義 \longleftrightarrow 民主主義と考えるべきで共鳴しているのである。

一つである筈のものである。ベンゼンは  でも  でもなく、 \longleftrightarrow  であるのと同様である。全ての思想の対立其の他人生万般の事がこの説で解決される。

ところで話をもどすが、戦後立身出世主義をけなすようになった。これは大賛成で結構な事と思っていると忽ち行き過ぎをやらかして若い人達の中には、月給貰って美人を妻にする事で能事終れりと考えている人が可なりあるやに思われる。始めからこのようでは望み通り立身出世の出来ない事は明らかであるし、ほんとは現状維持すら困難で没落あるのみで、組合の力でかろうじて停年まで喰いつなげれば上等である。極端な出世主義が批判されても人間の基本的な坊く事への心構えまで巻き添えを喰ってはしようがない。この心構えと出世という事は一つなのである。共鳴しているのである。

先きの先輩の話は深い味があるから、もう一度読んで吟味されたい。これは上役へのおべつかでも、立身出世主義でもない。仕事への情熱の表われである。

"Sentiment d'hiver"

鈴木溪太郎

去りにし五月の日の光 忘れ難くて

木枯しの吹きすさぶまま

耶穌墓地の 白きベンチに

かさこそと 落葉の舞いぬ

街は今宵 クリスマスイヴ

33. 12. 24

朝鮮における合成繊維産業

朱 炫 暉

恐らく殆んど日本の学友の皆様が現在の朝鮮について持つておられる知識というものは朝鮮が二分されていること、日韓会談、李ライン、李承晩大統領、金日成首相、そして数年前の朝鮮戦争などに関する、それもごく一部ではないでしょうか。今日問題になっている朝鮮人の帰国問題のことを知っている方もそう多くはないと思います。ましてや近代科学において遅れをとっている朝鮮の合成繊維などについては何ら御存知ないことでしょう。新聞に載ったこともなければ話題に上ったこともないのでむしろ当然であります。日本における先進的な合成繊維の発展に比べると朝鮮のそれはまだまだこれからといった処ですが、まあ一通り話を聞いて下されば幸いです。

元来、朝鮮には天然繊維原料が非常に少なく、中でも綿花は決定的に不足して自ました。綿よりも高価であるにも拘わらず、割に隅が一般に用いられたのはこの影響かも知れません。1945年、朝鮮が解放されたとき、北朝鮮即ち朝鮮民主主義人民共和国では繊維の不足、つまり衣服の不足を克服することは大きな課題の一つでした。綿が決定的に不足していたことから、先ず綿に相当し安価で而も原料の豊富なビニロン（朝鮮ではビナロンと呼ばれている）に目をつけられたのは当然です。原料のカーバイトは豊富に存在していますし、又その他の合成繊維については未だ技術並に原料が不足していましたから、それにしても前途には多くの困難が横たわっていました。元来化学工業なるものがなかったし、これから工業化するには人材、技術が不足している、それにも増してあらゆる原料から中間材料にいたる近すべて自分の手で作らねばならないというのが当時の実状だったのです。而も殆んどこのことが未経験のことでもありました。然しビニロンの工業化は実現されねばならない大きな課題で、それには人民の〈衣〉の問題の解決が託されていたのです。このビニロンの工業化において中心となって活躍され、又現在もその努力を重ねられている人は李昇基という人が御存知の方もいると思いますが、帰国される前には、京都大学の教授で“合成一号”の発明に際しての桜田一輝先生の共同研究者であった方です。李先生を中心に刻々とその工業化への

努力が積み重ねられていたその時、そして北朝鮮の人民達が独立した自分達の明日の幸福を築くために絶えなき努力を積み重ねていたまさにその時、朝鮮戦争が勃発したのです。何と不幸なことか！ 朝鮮の人民が戦争を欲したでしょうか？ ましてや同じ民族である兄弟達と戦うことを欲したでしょうか？ 祖國の建設のためには貴重な多くの若者が死んでいきました。原子兵器こそ使われなかったけれども各種の近代兵器によって、北朝鮮一帯はかつての広島と化してしまいました。しかし一方ビニロンは見捨てられはりませんでした。苦しい戦時にも隔離研究が続けられました。ビニロンの工業化だけではありません。その他人民の生活を豊かにするためのあらゆる研究は見捨てられてはりませんでした。数限りない不幸と悲劇を含んだ戦争も、1953年7月27日ついに休戦が成立しました。戦争によって甚大な被害を蒙った経済を復旧するために、1954～56年に亘る戦後人民経済復旧3カ年計画が人民共和國政府により発表されました。これは経済を戦前の状態に復旧することを目標としたものでした。ビニロンも着々と進められました。3カ年計画により復旧された成果の上に立って、1957年からは第1次5カ年計画が始まりました。これは工業面においては重工業の優先的発展とともに軽工業を急速に発展させよ、というものです。この計画に基いてビニロンの工業化は多くの困難を含みつつも、その実現への歩みを継続しています。1961年、即ち第1次5カ年計画の終る年にはビニロンの工業化は完成され、年産一万トンに達するはずでした。しかし昨年、共和国政府はこの計画を1年半短縮して完成することを決定しました。そして今年中には完成することを確実という実績を上げています。結局ビニロンの工業化は今年中頃には完成され、目標の年産一万トンの製品を生み出すことになるはずですが、いやこんなことを私が知っているうちにもうその目標は達成されているかも知れません。その他の化学繊維においてはベンベルグ、ビスコース、スフ、強力絹なども年産二万五千～二万八千トン作られています。原料パルプとしてアシ、ワラなども多く使われているようです。合成繊維については、ビニロンの外、ナイロン、ビニリデン、塩化ビニル繊維、アクリル系、ポリエステル系繊維なども量産には到ってはいないが、生産されています。

以上が北朝鮮における合成繊維の大略的展望ですが、私がここで強調したいのは、それは朝鮮における繊維以外の分野についても言えることですが、その生産力増進のテンポが速いことです。殆んど無から出発して人材技術の不足、戦争などの大きな障害を乗り越えてあらゆる産業がここ数年の間で非常に発達して来たという事実です。殊に電力、石炭の生産量は今年の中頃に

到れば日本のそれを追越すまでに発展しています。このような発展に際しては社会主義陣営諸国の物産面、技術面などの大きな援助もありますが、その発展を可能にした最大の要因はやはり自分達の祖国の繁栄と幸福を願う朝鮮人民の昼夜を問わず努力であると感じています。私などこうして日本に到着しているのはどうも恥ずかしいように思われます。一刻も早く祖国に帰りた
い気持ち一杯ですが、やはり向うに帰って役立つにはもっともってこちらで勉強を重ねてからでないと感じが済みません。幸に祖国からは在日朝鮮人学生のために奨学金を送ってきていて、私達の勉強を援助してくれております。

(以下次号へ)

祖^い谷^や川^{がわ}

吉 田 実

祖谷川はその源を四国第二の高峰である剣山に発する溪流で、祖谷口にて吉野川にそそぎこんでいる。

この奥深い、まさに日本の奥地ともいふべき谷にそって所々に部落がある。京上とか、平とか、或は一字などという名前からもわかるようにこれらの部落は八百坪の昔に源氏に追われた平家の一族が安庄の地を求めて移り来たった落人部落だと言われておる。そして彼らはずいぶん長い間にわたって外界との交わりしいものを持たずに彼らだけの社会に生き、彼らだけの社会に死んで行ったそうである。そして今も独特の風習を失わずに生活しているといわれている。

祖谷川について解説した本によると「その住居は今もって室町時代の様式を見せ、90物までが一棟三つ部屋の形をなしている。食物は常食が米以外であることは勿論であるが、古来ここには(米養生)、(振り米)などというのがあって、竹筒に米を入れて米の音を聞かせて病人を安心させてなおす。これは貧困な生活の断面をあらわしている。又結婚については、女は殆んど自由に結婚し離婚している。なかには十何回目かの結婚という女さえいた。それで普通のこととなっている。」と書いてある。もともと戦後は次第にそんな姿が変化して行っているが、それでもやはり何か世間離れのしたことがあるに違いない。こう思って我々三人は剣山へ登った後に祖谷川の最上流地点である見越峠^{みこ}から全長約八十キロメートルに及ぶこの谷を下り始めたのであ

る。昨年の八月のことであつた。

実際、この祖谷地方については僕の親しい友人達からも時々興味ある話を聞かされていた。ある友人は「二、三年前に教人のパーティで谷を下つていた時なんだが、夜、月があまりにも美しかったので宿を出て教人でぶらぶらと散歩していたんだ。月に照らされていない山肌が真黒な魔物のように両側に高くそびえており、一方月の光を受けていた僕らの附近は明るく輝いているような感じでね、そのコントラストがとてもすばらしく、もし水の妖精というものがあるとするならば、多分こういう時に現われるのだらうと本当にそう思ったね。ところでその教人の中に一人声のよいのがいて、調子にのつてつり橋の上で月に向つて独唱を始めたんだ。すると谷の氷の流れのすぐそばを白いものがこちらへ向つて来るじゃないか、ハテと思つてよく目をこらして見ると、はっきりとはわからないが、それが何と白い着物を着たすばらしい美人なんだ。黒い髪を長く後へたらしめてじつと歌に聞き入っているんだぜ。さつと彼女は平家の公重の血を受けた現代の平家美人に違ひない。こう思ったね。歌っていた男もそれに気がついてますます声をはり上げてうたうし、本当に画になりそうな感じだったよ。機械とマスコミに支配される二十世紀の世の中とはどうしても思えなかつたね」と僕に言つたし、又別の友人は彼の親父さんとやっぱりこの附近を旅行したときに「小学校の分教場へ宿めてくれと言つて頼みに行くと、宿直の先生が、こんな学校 なんか宿ることはない。民家へ行きなさいと言つて民家へ連れて行って来てね、その上、旅をしていると何かと不自由をし、又疲れておいででしょうというわけで、中学校の女生徒を三人ばかり派遣してくれて洗濯から飯タキから、おまけに風呂までわざわざたいてくれるし、いたりつくせりなんだ、ぼくと親父はただじつと坐つていさえすればよかつた。」といかに村人が親切で、心からなしてくれたかを得意そうに語つたものである。この他にもこのような話は度々聞かされたものである。これらの話は相当割引して聞かなければならぬような気もしたし、又、全部本当のような気もしていた。が、どちらにしても僕の祖谷川に対するあこがれを強くしたのであつた。

朝早くから昼頃までこの谷一面に降りそそいでいた雨も、いつのまにか止み、頭から被つていたナイロンの大きな布もとりはずしてリュックのポケットにねじこんでしまった。谷が深いので上をふりあおいでも壁が細長く見えるだけである。その細長い壁を横切つてすごい速さで雲が動いていたが、やがてその一角から日の光がもれ始め、谷底まで照らしはじめた。

数百メートルの大絶壁に至るところに待つこの谷はおよそ今まで僕の思っていた谷という概念を吹き飛ばしそうなスケールの大きなものであった。道は割に幅広く、立派ではあるが、所によってはまさしく谷底から150メートルのところに木枝やコンクリートを使ってせり出したところもあって、そんな所から下から見ようものなら、今にも吸いこまれそうな気配を感じてあわてて首をひっこめるだけである。

我々はそのような道を何も言わずに黙々と歩いてきた。もう20キロばかり歩いたであろうか、そろそろ疲れを感じはじめていた。AもHも二人とも黙って後からついてくる。疲れ気味な身に雨上りの空気が実に気持ち良かった。だが僕は目の前に次々と現われてくるすばらしい景色を心ゆくまで楽しむことができたのを満足に思いながらも、正直なところ少々物足りなさを感じはじめていた。いふまでもなく、平家の落人に因してである。たしかにここは山奥である。見越峠から二時間ばかりのところではガマやヘビに終お目にかかったし、ある時は見るだけでなく、木の根と間違えて長々と道を横断して横たわっているヘビを踏んであわてた事もある。又、仏の函を書いて暮しているのだと言う僧侶に会ってお茶を御馳走になったかわりに彼の御高説を一席聞かされた。でも求める平家の子孫らしいのはついでお目にかからなかった。時々出会うこの谷の住人のどこかに、もしや平家の貴族の面影がありはしないかと顔をじっとみつめたりもしたが、一向に黒い髪を後へ長くたらしめた美人も現われなば、白い着物を着た人にも会わなかった。

「オイ、あれを見てみ」

突然Aが大きな声で後から僕に呼びかけた。みると彼の指さす方向には松の木が一本見えていた。その松は道から少しばかり下ったところの絶壁に根を下ろし、斜に上へ向ってのびている。そしてその先は横に少しばかり曲って丁度人が坐れるような具合になっている。でもそれだけである。他にその絶壁には木が一本もないから自立つにはちがいないが、何だっってわざわざ声をかけたのだろう。そう思って

「あの松がどうかしたのが」

と問い返すと、

「別にどういふ事はないが、君あれに登って、あの先の所で坐っておられるか」

と言うから

「アホなこと言うな」

といへてうざらうして

「もっともあの先の所に特別に人を引きつける何かがあれば話は別だけどね」と返事しておいた。

僕は内心少々シャクにさわった。せっかく平家の落人に就いて色々考えていたのにその考えを中断されたからである。でも良く考えて見れば、そもそも二十世紀の世の中に、いかげんな話につられて八百年前の幻影を求めて例え山奥とは言え、歩いている僕自身に腹を立てた方がよいのじゃないだろうか。八百年前に貴族がいたからといって、谷間に住んでいる現代の住人にまで平家の公達や、或いは白拍子の面影を稱す華自体がナンセンスというものであろう。そんな事を考えているより松の木の伸び具合に感心したり、溪流の碧さに驚いているAの方がはるかに現代的でかつ、美的センスの持主たる文化人と言えるであろう。さしずめ僕のようなのをタワケと言うのだろうと思ったりした。

しかしそうは思っただけで見たしかにこの祖谷川は現代の合理性で割り切れない何物かがあるように感じるのも又事実である。部落という名の谷間に面した高い山の急斜面に今にも落ちそうな感じで出来上っていたり、こちらの岸と向う岸を結ぶ橋の材料に植物の「かつら」が活用されていたり、又最初に述べたような家の構造を巨のあたりに見ただけで、やはりここは伝説の土地だと感じるのである。それで僕は自分自身にまだ全行程の半分しか歩いていないんだ。それに登壇から登台くなくないのでおそろしく恐ろしくすばらしいことがあるに違いない、と言いつけてくれた。そしてもうかすると獅子文六の「てんやわんや」に書かれたような事がこの僕の行手に落ちないともかぎらない。そこまで考えてふたたびいろいろな想像で心を遊ばせたいのである。

空にはもう殆んど雲がなかった。午後の強烈な日射しが今度はよっしやぶく我々の頭上に降りかかって来ていた。

向うに木樵の小屋らしいのが目についたので、そこへ行ってしばらく休むことにした。無人小屋ではあるが、思ったよりさっぱりして気持ちがいい。入口の戸や窓を開けはなして風通しをよくしてから三人共あまり高くはない床の上にゴロツと横になった。AとHは昨日の剣山登山の疲れも出て来たと見えて面もなく高いびきをかきはじめだが、僕は不思議に眠くはなかった。

僕の横になっているところから入口を通して谷間の景色が良く見える。そしてすぐ近くに小さなつり橋がかかっているのもその景色をなかなか面白く見せている。僕はその景色を見ながら先程の空想を続けていった。やがてその想像は段々と具体的になって行きはじめた。

この谷のどこかにきっと平家美人はいるに違いない。今にも彼女はその美しい姿を平家の公達の後裔とともに現わすかもしれない。いやきつとつり橋を渡って一人でやってくるだろう。そして僕に「ようこそ」と挨拶をするだろう。あるいは何にも言わずに口許に微笑を浮べて手にもった扇でまねくかもしれない。いずれにせよ僕等三人は彼女に依わねばならない。そしてつり橋を渡って向う岸へ行き、細い勾配の急な小道をゆっくりと登ってあの家々の一つに入るだろう。その家の内部は沢山の燭台につけられた明りに照らされ、そこには僕らを迎えて来た人と同じように黒い髪を長く後へたらし、白い着物を着た白柏子のような人達が大量にいるに違いない。部屋の家具はいつか京都の祇園祭の宵山に旧家の店先で見たようなものかもしれない。そして向もなく古くから祖谷地方に伝えられて来た神代おどりが始まるに違いない。僕は神代おどりなるものをまだ見たこともなかったし、どんなものか知る由もなかったが、多分そのようなときに女達によって踊られる優雅なものに違いないという気がする。そしてその後では……僕の空想は止まるどころを知らなかったが、やがていつの間にか深い眠りに落ちていた。

心と肌にもすら寒いものを感じて目を覚ましたとき、谷向にはすでに夕暮の紫色がしのびよっていた。対岸の山の山頂付近だけが夕陽を受けて橙色に輝やっていた。まだ少しぼんやりとした気分のまま先程の空想を思い出して何の気なしに近くの小さなつり橋に目をやったときである。思わずハッと身がひきしまるのを感じた。僕の想像していたような白い着物を着た女の人がこちらへ向ってつり橋を渡ってくるのではないか。僕は入口から半身のり出して息とせずじつと彼女を見つめていた。女は夕暮の紫色の中を一步一步こちらへ近づいてくる。だが彼女が橋を渡りおえた時分には、僕の期待は無残にも大きな失望に変じていた。その白い着物は夏になると若い女なら誰でも着ているワンピースのようなものであったし、彼女の頭には長い髪の変りにショートカットされた髪が風に吹かれていたからである。その若い女は小屋の入口にいる僕を認めてちよっと不審そうな顔をしたが、すぐに前を通りすぎて行ってしまった。涼しそうな目が印象的ではあった。すぐ向うで誰か友達に会ったらしく、小屋の中へ再び入りこんだ僕の耳に明るく話し声が聞えて来た。どうやら最近、阿波池田で見た映画のことを話しているらしい。「オイ、もう起きろよ」まだ寝ていた二人に声をかけて起し、再び我々は谷を下りはじめた。

突然、谷の上空を斜に横切ってジェット機が金属性の音を立ててとび過ぎて行った。

つんどく

—— 夫 昭 社 ——

学生生活も後僅かになった昨今、色々と反省すべきことは沢山あるが、これから私の読書について書いて見ようと思う。元来私はラジオや無線に興味を持っていたので大学に入る前は、本を買って読むなどということは殆んどなかった。そのため、随分片寄った知識しか持っていない、しかしそれではどうも具合が悪いので、京都へ来てからはできるだけ沢山の本を読むことに専念した。暇さえあれば本屋をまわりこつこつと買い集めた。本を読むのに何も自分で買わなくても借りて読むという手があるが、私はどうも本は借りては読めない性分だ。どうも自分のものでないと熱が入らない。だから読みたい本を誰かが持っている時などは、それを借りることより、同じものを本屋で求める方であった。といつても世間に入り勝ちな蒐集癖ではない。一応買った本は読むつもりで買ったので、目次くらいは読んである。そんなものがいつの間に積り積り昨日勘定したところでは、ここ四年間に320冊にもなった。これは学校の参考書等も含めての話であるが、それでも決して少なくない数である。本屋の書棚には随分沢山並べてあるが、同じものを幾冊も並べたりしてあるし、子供用から料理の本迄あるのであるから、本当に買って読みたいと思う本はそう沢山はないものである。とすれば、300冊は決して少なくはないと思う。私は買った本はその書店、著者、発行年月日、出版社、価格、をノートに記入することになっている。だから手もとにない本でもその目録をみれば、すぐわかるようになっている。これは一種の趣味であるが、益するところも少くない。例えばそれをパラパラとめくってみればそれだけで、四年來の読書傾向がわかるし、自分の物の考え方の変化などを簡単に知ることができる。買った本により考え方の変化がわかるという風に書くと、まるでそれらの本の内容通りに同化されていったように誤解されるかもしれないが、それは正反対である。大体興味を持った事柄があったり、悩めることがあった場合、本を買って調べたり、慰められたりするのには、自分と同じくらいのレベルの本によってである。ここで少し、私の本についての考え方をのべて見ることにする。昔から良く言われていることであるが、本は

決して精心の糧にはならない。本の効用は自分のレベルを知ることだけである。謂わば、単なる物指しでしかない。普通は本によって人間の考えていることを伝えるのであるが、人間の考えというものは、時間、生命、その他どのような次元の世界のものかは知らないが、とにかく相当に複雑なものであることは確かだ。だからそれを限られた単語でもって書き表わそうとするのであるから、まことに無理な話りで、本によって十分に考えを伝えるということは、初めから無理なのかもしれない。吾輩は一見に如かず等と言われるのもこのためであろう。それならば本は全く必要ではないのかと言えば、そうは思わない。私の考えでは本は丁度自動車のメーターのようなものである。スピードアップには直接役には立たないが、自動車にはメーターは不可欠である。別の言い方をすれば、調味料かビタミンみたいなものである。ビタミン、糖がらしばかりでは腹が減って病気になってしまうだろうが、それらのない食物も具合が悪い、あたりまえの事であるが、腹をふくらしエネルギー源となる飯と、それをおいしく食べさせ、活用するビタミンと調味料とが調和のとれた状態が望ましい。このビタミンや調味料やメーターに相当するのが本であり、他に効用はないものかと思う。だから本だ本だといって本にばかりかぶりついていては、博学者にはなれるかもしれないが、栄養失調のかりかりでしかない。むしろ、残飯を喰って丸々と肥えている豚の刃が宇宙の原理にかなっている。結局本を読んでもそれだけでは、賢くはならないというのが結論である。読むと考えるより調和のとれた読書こそ真の読書であり、本が心の糧となる唯一の場合である。以上のようなことは昔から多くの人々によって言われてきたことである。そうして私も今は全くそのように考えている。それならば実際読書するにあたり、どのような態度をとればよいかということになるが、私の考えでは、まず読むことであると思う。ひたすら打庄と道元は言ったが、ひたすら読書であると言いたい。つべこべ理論をこねまわっていては三文の足りにもならない、まず実行である。各人各様に嗜好趣味嗜好が異なるのであるから、初めはアトランダムに始まったとしてもある時間がくれば一定の方向がつくものである。私の場合全くそのようになったのでかく書いた次第です。さて本本と書いてきましたが、本と言っても沢山ある。電話帳を見て読書という人はいないだろうが、本屋に売っている本にも随分と段階がある。例えば、目下流行中の週刊誌等は、本の部類には入らないと思う。あんなものは製本した紙くずである。ばからしいから買わないが、広告等をみているとたまには読みたいと思うことがある。そんな時は立ち読みをすることになっている。それで十分間に合っているから買わない。

とす
る人
ミの
スコ
おれ
いう
気が
る。
る人
いる
忙し
ごし
して
が多
けで
分派
の本
それ
われ
源氏
考え
古唄
う。
派な
ば、
時代
題に
らで
なか
な影
均一
のよ
山あ
つま

とすると誰が買うかということになるが、どうやら電車に乗って通勤している人に多いように見受けられる。まったく現代の都会生活はひどい。マスコミのために人間がひどく圧迫され、神聖をすりへらしている。その人達がマスコミの先導たる週刊誌を買うのだから不思議なものである。いじめられてお礼をしているようなものだ。本当に現代人にとって週刊誌が必要であるというより、むしろマスコミが必要とする方向へ人間を追い込んでいるような気がする。電車の中では殆んどの人が何かを読んでいる。まったくおそれ入る。単に退屈で気遣いに流し読みしているのならまだしも、むざばり読んでいる人が多い。どれだけの楽しみがあるかは知らないが、一種の習慣になっているようだ。動いている車の中では目にも良くないことは確かである。この忙しい都会に住んでいて自分の自由になる時間くらい、もっとのんびりとすごしたら如何なものだろうか。早い話が、電車の中ではできるだけボーッとしていたらどんなものであるだろうか。もう少しゆったりとした余裕のある人間が多くなるのでなからうかと思つた。これはあなたがた感傷的なレジスタンスだけではないと思う。さて週刊誌は除くとしても、毒にも薬にもならぬ本が随分沢山ある。そのような本は大概はパッと出てスーと消えていくばかり運命の本である。よく売れているといつても本と言うにはあまり値しない本だ、それでは本の中の本とはどのような本であるかと言うと、これ又古くから言われ月並の言葉であるが、古典と答えるより仕方がない。普通古典と言うと源氏やら万葉を想像するのでちよつと手が出ないと考え勝ちであるが、私の方で考えくいる古典はそのような古いものではなく、もっと手近かなものである。古典と言うと語弊があるかもしれないが、昨年出版されてゐる古典はあると思つた。例え数年間であつたとしても、絶版が出て読書人が絶えないとしたら立派なものである。まして数十年、数百年の間、読み継がれて来た本であれば、なおさらのことである。いつの時代になつても読まれるということは、時代を超越した何物かを含有しているということである。人間の根本的な問題について論じているからであらう。そして、普遍的な答をもっているからであらう。そのような古いものこそ現代に最も益するところが多いのではなからうか。直接には何の役にも立たないかもしれないが、間接的には大きな影響を与えると思つた。やれ資本主義だ、やれ共産主義だといつて、人間を均一化して人間性を失いかけてゐる現在、大いに考えてみる必要がある。そのようなものは大部のものが多い。しかし、文庫になつてゐる小さいものも沢山ある。読もうとすればいつでも手に入る便利な時代ではないか。我々はいつまでも人間でなくては行けない。文明に負けず、文明を享樂しなくては行

けない。そのためにも古典を読むことが必要である。話はすこり変わるが、最近お経に少し興味をもち出した。普通お経というと、すぐ坊さんを想像し、葬式などを思い浮べるが、それはとんだ見当違いであるということがわかった。思うにお経が誤解を受けている原因は全部坊主にある。大体お経は、シヤカの生前の言葉を弟子達が伝えたものであるから、内容はきわめて、実際の事である。ごくありふれたことについての説法が多い。だからそのままでも十分現代に通用する筈なのであるが、惜しいかな我国ではそうはいっていない。というのは、昔からの日本のお経は、中国訳をそのまま棒読みにしたものであるから、聴いていてさっぱり意味がわからない。わからないからありがたいと言う人もいるかもしれないが、口ではお経を誦え、意味を全然知らないのでは、佛塚に対する冒瀆でしかない。小説坊主さえいるのだから佛塚に尻を向けて、人間の方へ向い、お経を口語で読むくらいの気のきいた坊主はいないものだろうか。思えばそれを認めている社会も少しどうかしているのでは だろうか。先祖の命日にお経をあげに来たら、その経文の内容について質問し、坊主をいじめてやるのも案になって良いかも知れない。わざわざこんなことを書いたのは坊主はとまかくとしてお経もすばらしい古典であるということに気がついたからである。さて話しをもとのっんどくに戻すことにする。本には、新刊書と古本とがある。どんな割合で買ったかは調べてみないのでわからないが、古本も大分ある。そして古本のうちには、ひよいと買った本が多い。新刊であれば、一応広告等で書名くらいは知っているのが多いし、普通は初めからその本を買おうと思って本屋へ出かける。しかし古本はそうはいかない。探してみても面白そうなのがあったら買おうかというのである。そこに古本のたのしみがある。しかし近頃では古本にもみな正札をつけてきれいにりてあるので、昔言われた古本あさりというような言葉はもはや実在しないうちに思う。それでとたまに面白いのがある。一例をあげて見ることにする。昨年天神さんで買った本で、「倭漢三才図会」というのがある。これは複写版であるが、大阪のさる医者出版した本で、江戸時代の百科全書である。三才とは天地人、即ち森羅萬象のことである。色々なものを絵入りで説明してある。例えば、外夷人物という編をみると、女人国というのがある。俗名女護島と書いて女の人を画いて、色々説明してある。参考までにその場所を引用すると、東南海上、扶桑國東、天空の西北大高海西、日本東北海島、の四ヶ所を挙げてゐる。その他にも、不死国、長脚国、等面白いのが沢山ある。当時の人がどれだけ信用していたかは知らないが、とにかく面白い。如何にも泰平の江戸時代らしい。こんな愉快なのは

そう沢山はないが、それで古本を手にとってみれば、その時代というものが実際にはっきりとわかる。有名な「西国立志編」そういう本があるが、これなどを見ると、資本主義の発展期における青少年の意気込みを身近かに感じる。又大正五年の改造の附録として出た「第二貧乏物語」をみれば、共産という字はみんな伏せてある。これなど当時の社会主義への圧力を如実に物語っている。一つ一つ書けばきりがないが、例え内容は読まなくても、紙質や装釘をみているだけでも、その当時の社会状況が色々とわかり、興味がつきない。昭和15、6年頃まではすばらしい紙質のよい本が沢山出版されているが、大戦へ突入とともに、紙は悪くなり、本の数も少なくなってきた。物価不足の22、3年に出版された本の紙の悪いことは御存知の通りである。近頃流行のコインや切手の蒐集と同じことが言えると思うが、本一つとってみても社会の縮図である。以上つまらぬことを書きましたが、これが私の読書観であります。本に対して人一億の愛着を感じ、暇さえあれば本屋をみてあるけていたが、これから仕事につくようになれば、今までのように暇はないであろうし、興がのれば朝寝読みかけるといふことき出まばくなるだろう。しかし今迄以上の情熱をもって本を探して、つちみている。最後に私の本当の趣味は読書ではないといふことを付け加えておく。碌々本に志した理由というのが、高校時代まで、本に親しみなかつたので、何とかして人並になろうとした努力に外ならない。多分にやせ我慢的な要素を含んでいた。わかりもしないむずかしい本を讀んだり、それを他人に強要したりしていた。そのやせ我慢がどのような結果に終わったかは自分では何ともわからない。しかし考えてみれば、まんざら無益ではなかつたようである。私の趣味はアマチュア無線である。無限の空間へ電波を放ち、未知のハム達と交信するスリルこそ最高のものである。下宿生活は何かと不自由で、京都では実現できず中断し、免許も切れてしまったが、春には又免許をとり直し、なつかしい以前のコールサイン、JA9BMY、で再開するつもりでいる。今年からは免許もとりやすくなりましたし、皆様の中からも開局する方が多いと思いますが、この次は一つお空でお会いしようではありませんか。長々と勝手なことばかり書いてきましたが、本誌の編集人、荻野君に口だけではなく、実際に協力しようと思い、拙文をかえりみず載せてもらった次第です。

闘

志

上野康男

昨年12月7日、我がサッカー部は、三年間の苦難を克服して遂に関西リーグの四部から三部へ復帰する争が出来た。藪目には四部等と言えば滑けいに見えて笑われるかもしれないが、我々にとって、この争美はひとしお感慨深いものがあるわけである。

既にあの大きなホールさえ行方を見定め難くなった夕闇迫る球場に勝利のホイッスルが鳴りひびいた時、湧き上がる歓声と拍手の中で、私は四年間の部員生活の教々の思い出の頁を朧しくめくってみるのであった。

心の運動部にも見られるように、我々も工芸学部が離れているために起る下働き、工科系であるが故に起る時間的な不自由さ、更に経済面での苦しさ等、別外にもれず悩み続けているのである。又春と秋の試合は殆んどの上、日曜、祭日を使うために僅か一時間の試合のためにハイキング等に恵まれ過ぎていた程の土地に住む我々が、それらをすべてファイにしなければならぬという、身勝手ではあるが現実的な辛さ？もあった。であるから又の教名の世帯の心が一つの焦点に集まるには相当の困難があった。しかるに我々のモットーとする所は、すべてが楽しくあるべしということである。別ないやな思いをして返る試合に勝つことは強制されない。ボール一つを愉快地蹴り合うことに満足を感じ、練習の後、試合の後のテッカンビールの一口と新生一本の美味さを味わいたいものがあつたれば良かった、がしかしその味も、無理をせずともちっと美味しいものになる筈であり、美味くなって然るべきものである。そう私は常に思っていた。

三部復帰を決定した一戦の相手は、神戸商船大学であった。ここは以前、三度苦戦をなめさせられた因縁っきのチームであり、又三年前に入替戦に惜敗し、敢えなく四部転落となった時と同じ球場で対決するということも皮肉であった。

三回生以下で作った新チームは幸い教名の有力な新人を得て大いに意気を高め、九月から寸暇を惜しんでは実験着をユニフォームに替換えての練習を重ねていた。それはとり立てていう程の厳しい練習ではなかったが、全員が

今年は一旗上げるんだという熱意に燃えており、今迄欲しても得られなかった雰囲気には、自分の怠惰であった過去を恥じながらも、美しい程の頼もしさを感じたのである。これこそ三部復帰の念願を実現する大きな原動力だ。

かくこの原動力を貯えたわがサッカー部は、ここに三部昇格を賭けて、商船大の前に立ち上がったのである。残念ながら、体力に於てはみるからに数段の差を感じた。わがイレヴンは当っていただけよとばかりに斗志を燃やしていた。前半互角或いはそれ以上の試合を運び後半5分、遂に待望の一点を先取するや試合は正に、激突に激突を重ねて来た。いつものように体力に物を言わせる商船は猛烈な反撃に出たのである。後半もむかばをすぎる頃さすがにこちらは疲労の色が濃くなった。何しろ正規のグラウンドは織姫学部のグラウンドの3倍近くもあるのだから、動きが違うわけである。体力の差はここに至って、いよいよ明らかになって来た。オールと糸との違いであろうか？ その良時は既に5時に近く迎りはますます暗くなって来た。ス心配になってくる。というのは、このイレヴンの中も人迄が近視でしかも安全のために眼鏡をはずしている相手はと言えば、入学時の視力検査が厳しいだけに目のいいものばかり。“暗くなると 闇にまぎれてなだれこんで来るぞ”と試合前に愛敬者の一人が笑った程、我がチームはトリ目？ 葡萄？ という悲しい事実があった。だから彼らは文字通り目を皿の如くして、喉いつかんだばかりの悲愴な奮闘を続けなければならなかった。しかしながらその驚くべき *fight* と確実な *Defense* 陣は遂に商船の必死の猛攻に屈しなかった。そこには何か不思議な力が働いているようにさえ思われた。ホイッスルが鳴って試合は終了したと同時に、三部昇格の念願が実現されたのであった。声を上げ手をたたき互にだきあつて喜び送手の周りに、唯夢中で飛躍していた我々四回生の部員、数人の先輩、部長の井上先生が拍手をもつて取り囲む。握手についで握手、良かった、良かった”同じ言葉の連続、歓声と拍手はしばしの間賑々としたコンクリートのスタンドにこだました。ホイッスルがなって10分もたたぬ間に、迎りはすっかり暗闇に包まれ、代つて阪急沿線の数々のネオンがまぶしい光を運んでいた。一きわ目立つ真赤なビールのネオンを見上げて“ごっつい大きう見えるワ”とさも愉快でたまらぬと言ったような表情で笑ったのは見事大役を果たした主持の矢倉君。どつと涙いて続く笑い声の中を次々と勝利の煙草の煙がゆれていた。四年間の部員生活がこの様な感激の中に終るつとは入学当時サッカーをろくに知っていなかった私にどうして予想し得たであろうか。勝った事のみが嬉しかったのではない。全員上げて一点の曇りもない快適な気持を分ち合う争の出たのが何より嬉しいのである。わざわざ西宮迄かきつけてくれた諸先輩の胸中もさぞ私以上のものがあつただろう。皮のボール一つを通じて古い先輩から一回生に至る迄、堅い陣りをもつことは運動部の大きな利点の一つであるが、我がサッカー部はこの日の喜びをもつて更に固く結ばれて行くことであろう。ややもすれば 単調に流れ

勝ちな大学生活を楽しいものとし、又サッカー部という強いバックボーンを背に卒業できるという幸運を得て、私は誰にもなく感謝しているのである。

更に主将として重責を果たした矢倉君以下、二年間マネージャーを兼任した土井君、野田君、(いずれも三回生)二回生の林君(次期副将)朱君、一回生と熱心な繊維化学科の諸君がいることが心強く、今後の闘いを信じて止まない次第である。最後に、昨夏不慮の事故でさくなくなった故広木義保君も事情あって退部する迄二年間、同じ部員として大いに活躍したファイトマンであった事を附記し、卒業に当って改めて哀悼の意を表したい。(終)

登山はスポーツか

高橋 宏

最近夏山ブームとか今日に至っては冬山ブームだなんてジャーナリズムが騒ぎ立てるものだからそれに浮かれてピッケルを岩を登る時に使うものだと思っている様な連中が冬山に押しかけるものだから時折珍妙な遭難事件に出くわす事もあるが一体こうした者は登山をどう考えているのだろうか。

私は少くとも登山をあく迄もスポーツと見做している。勿論定められたルールはない。しかし定文化していないルールはいかなる登山においても存在する。イギリスの有名な登山家でエヴェレストで亡くなったマロリーはある講演会の折一聴衆から「一体何のために登るのか」と問われ、「山はそこにあるから」だなんて分った様な分らないような返答をしたのを日本のおちよこちよ登山家がおぼえて何かと言えば「山はそこにあるから」と得意然として答えているのは実におかしなものである。私はこのマロリーの返答は単なる逃げ口上に過ぎないと思っている。スポーツの一群に属するものであると頭から考えれば別にそうもめる事も批判されることもないと思う。そして記録を作るなら作るでよいし又先人のルートをトレースするのもよい。但しこのスポーツの相手は自然である。対人間ではない。勿論潜在的には人間を相手にしている事もなきにしもない。前提としては自然である。この事を知ってこのスポーツを行わねばならない。勿論ルールもこの自然によってその時々に応じて変わってくるが、いついかなる時にもそのルールの根本原理は変わらない。その原理このスポーツの根元をなすものは「自然とは闘ってはならない、そして己と闘う」という事である。このルールを破った時のペナルティーは大きい。間違えば死である。それ故この原理を犯すような登山者は競技場で始終反則を犯す選手とは変わらないのであって失格者である。じゃそのルールはどうして知ることができるのかそれは凡ゆるスポーツマンについて言

えるトレーニングである。そして己の力と相手である山をつかさを知る事である。よきコーチの下ではげしいトレーニングをすれば少くともどんな最悪の事態に至つても最少限度の被害で逃れる事が出来る。即ち惨敗は喫しないであろう。しかしこの世の中には非常にロマンチックな気分の人間も多くいて偉大な山の光景に魅せられて始めはハイキングで始まったものが度重なる毎に己の力も知らずに深入りをして遂には大きな事故をまき起す結果を招くことの多い事よ。それは己の山行回数が多いから山の知識もあるだろうという自己満足の結果次第に天狗となり、己の甘い感傷のもとに行動を起すからでスポーツには決してセンチメンタリズムやロマンチックな感情は許されないのである。「勝負の世界はきびしい」とは俗っぽい言い方だが、その通りである。それ故にハイキングから登山へと何らのトレーニングもなしに駒を進めて来たものはまず駒を止めて足もとを見るがよい。君は勿論、断崖に立っているかも知れないのだ。そういうお前はどうかと問われれば私にはつきり「身分相応の登山をやって来た」と答えるだけの自信がある。自信れと思ふなら思え。山岳部入部当時の新人の折はばかりに大きな荷物をついで山頂のはるか下の山すそを上ったり下りたり、朝は早く起きてテントの雪まけに飯炊き、夏なら薪割り、ザイルを持ってもうアマニ油をぬったりまいたり同じアスザイレンを何度も同じ岩場を目をうかがってどこにどんなホールドがあるかわかる様になるまで繰り返して登りおりして今尚登る山は御岳山ばかりでそのうちに四年生となり次は新入部員に前日繰り返して教える。別に大した進歩もないが、スポーツと考えればこれで結構楽しいものである。これがスポーツの常道ではないだろうか。この道が嫌なばかりにこれを避け趣味で登山するものの危険さよ、何の益もないではないか。自己流の登山はスポーツアルピニズムでない。唯単なる道楽にすぎないであろう。それが登山は人によってスポーツにもなり危険きわまる火遊びにもなるのである。だから山登りを「山はそこにあるから」だとか「視界からの距離」などヒルな思想や理屈をこねまわすより単なるスポーツとして見れば事は簡単である。そして遭難などがおこればそれは練習不足だとか自分不相応のことをしてかした尊とさんざんに酷評すればよいものを「吹雪に消える若き生命」とか「奇蹟の生還」などと甘い映画のタイトルのような見出しで週刊誌、新聞などに書きたてるものだから調子に乗って、あたら両親に借金を返せずにおみ倒す不屈き者も出て来る始末で遭難はスポーツ登山を行うものには一大汚辱であると思う。そして又自己の行動をおこす前に自分は又何年かの借金を両親にして居ると思つて行動を起すべきで、決しておみ倒しのなりようにするべきであると思うが、皆さんいかがです。

(終)

卒業生の就取状況

K M 生

今年は大学創立10周年に当る。この3月卒業予定者の就取も全員決定しているの、昭和28年3月卒業の大学オノ期生以後、全卒業生202名についてその就取先をオノ、又表に

まとめた。専門学校・大学専攻科の卒業生についても調査すれば又一層面白い結果が生れたらうが、資料不十分のため次の機会にでも譲るとして今回は割愛した。

オノ 表

(昭34.1.1.現在)

宮公守学校法人等 (25名)

京都工織大学(京都) 4名	新宮高校(新宮) 7名	京都市水道局(京都) 7名
京都大学(京都) 3	梅壘中学(京都) 7	工芸指導所(京都) 7
オハイオ大学(米国) 1	名東一中(徳島) 7	大阪大学(大阪) 7
起工業高校(尾西) 2	織維工業試験所(東京) 1	織染検査協会(新潟) 2
佐野工業高校(京佐野) 1	県立工業試験場(松江) 1	輸出織染工友組(福山) 1
倉敷工業高校(倉敷) 1	奈良県庁(奈良) 1	化織検査協会(大阪) 7

化織及び紡績会社 (36名)

東洋レーヨン(大津) 4名	日本エクスラン(西大寺) 1名	大日本紡績(桑名) 2
日本レイヨン(奈良) 7	旭化成(延岡) 2	吳羽紡績(奈良) 3
東邦レーヨン(徳島) 2	吳羽化成(勿来) 7	倉敷紡績(枚方) 2
三菱レイヨン(大竹) 1	帝国人絹(岩国) 3	富士紡績(静岡) 1
倉敷レイヨン(西条) 1	近江絹糸(羽前) 2	興和紡績(大阪) 7
鐘化カネカロン(大阪) 7	東洋紡績(守口) 7	興国人絹(東京八代) 3

紙及びパルプ会社 (6名)

巴川製紙(静岡) 7名	大日本セロファン(高槻) 2	愛知セロファン(名古屋) 7
紀州製紙パルプ(吹西) 7	聯合紙器(大阪) 1	

ゴム及びプラスチック会社 (14名)

大津ゴム工業(京大津) 2名	三星調帯ゴム(大阪) 1名	岐阜プラスチック(岐阜) 1
大機ゴム工業(大阪) 1	BSタイヤ(久米) 1	積氷化学(大阪京都) 2
日本ダンロップ(神戸) 1	井上金属工業(大阪) 1	東京ファインケミカル(千葉) 1
阪東調帯ゴム(神戸) 1	大阪金属工業(大阪) 1	木村鉛工所(大津) 1

纖維化工用樹脂及び糊料製造会社 (16名)

日本ラ化ホルド(東京) 3名	六成化学工業(京都) 1名	日燐化学工業(伊丹) 1名
大日本インキ(京橋) 4	高分子化学工業(大阪) 1	松谷化学工業(伊丹) 1
三京化成(大阪) 2	ユシロ化学工業(三重) 3	

纖維油剤製造会社 (9名)

花王石鹼(和歌山) 2名	竹本油脂(蒲郡) 1名	三洋油脂(京都) 1名
一方社油脂(大阪) 2	日本油脂(尾崎) 2	青木油脂(大阪) 1

塗料及びインキ製造会社 (8名)

日本ペイント(大阪) 1名	久保孝ペイント(大阪) 4名	坂田商会(大阪) 1名
関西ペイント(大阪) 1	光陽塗料(大阪) 1	

化学工業会社 (8名)

宇部興産(宇部) 1名	片倉チッカリン(東京) 1名	昭和工業(守山) 1
出光興産(徳山) 1	別府化学工業(加古川) 1	日本染化学工業(大阪) 3

製網製網会社 (6名)

富山漁網(京都) 1名	森下製網(岡山) 3名	森東製網(桑名) 2名
-------------	-------------	-------------

纖維化工及び染色会社 (44名)

富士帽子(伊丹) 2名	丸福纖維(神戸) 1名	太田染工(大阪) 1名
日本クロス(京都) 5	京阪加工(京都) 2	東海染工(徳川) 1
東洋クロス(岸和田) 1	関西帆布(神戸) 1	三染色(自営)(金沢) 1
白洋舎(東京) 1	東洋ナイロン編物(大阪) 1	倉庫製線(金沢) 2
立誠纖維工業(大阪) 1	オーレーヌ(京都) 8	岩戸染色整理(一空) 2
平安工業(京都) 1	竹仁染工(野州) 3	黒川二業(京都) 2
中村織布(自営)(能登川) 1	天和川染工(堺) 2	京都染工(京都) 1
赤産纖維(金沢) 1	恒染工(堺) 2	朝日加工(豊後津) 1

染料製造会社 (4名)

島崎染料(京都) 2名	山田化学(京都) 2名
-------------	-------------

商社 (21名)

丸紅飯田(大阪) 2名	中村産業(大阪) 1名	日商(大阪) 1名
三菱商事(大阪) 1	伊藤忠商事(東京) 1	森六(大阪) 1
日光商事(大阪) 2	三共生興(神戸) 1	青木商店(自営)(大阪) 1
福畑産業(京都) 1	岡本商店(大阪) 1	明成商会(大阪) 1
日本トレーディング(大阪) 4	I. C. I. 日本支社(大阪) 1	
岩井産業(大阪) 1	安宅産業(東京) 1	

その他(4名)

日本交通(大阪) 1名 料理店島岩樓(自営)(都)7名 就取先不明 3

才 2 表

業種	卒業年	昭和28年	29年	30年	31年	32年	33年	34年	合計
官公庁学校法人等		4名	7名	5名	1名	1名	2名	5名	25名
化繊・紡績会社		3	1	2	6	9	11	4	36
紙・パルプ会社		0	0	0	1	2	3	0	6
ゴム・プラスチック会社		5	1	0	0	0	2	6	14
樹脂・糊料製造会社		2	3	1	2	3	1	4	16
繊維油剤製造会社		0	2	1	1	2	2	1	9
塗料・インキ製造会社		2	0	0	0	1	1	4	8
化学工業会社		0	0	2	0	2	2	2	8
製網製網会社		0	0	2	0	2	0	2	6
繊維化工・染色会社		4	8	7	9	4	5	7	44
染料製造会社		0	0	0	1	1	0	2	4
商社		5	3	3	3	2	2	4	21
その他		1	1	0	0	0	0	0	2
不明		1	0	1	1	0	0	0	3
合計		27	26	24	25	29	31	40	202名

ここで面白い事を見つけた。勿論これには卒業年度別の卒業生平均能力は一定であると言う条件のもとに考察すべきであるが、就取状況と繊維業界の好不況との間に面白い事柄がある。即ち、昭和28~30年の間の不況期と昨年未の不況期においては、化繊・紡績会社の就取状況は悪く、逆に官公庁学校法人や繊維化工・染色会社の就取が多くなっている。しかし商社への就取状況は毎年平均3名宛で一定しており、これは業界の景気には無関係にセールスエンジニアを各社が欲している事を示しているものと思われる。又、樹脂や油剤等の製造会社についても大体毎年一定している様でこれは業界の景気には余り関係がなさそうである。その

他化繊維の大進展の影響で製網製網会社や中間物製造化学工業会社への進出が最近特に目立っている。

ここで少し別の考察をしてみよう。と云うのは最近発展的な繊維化学科とは全く逆に後退の一路をたどる養蚕科の卒業生の就取状況を調べてみようと言うのである。工学と農学とでは必ずと両者に大差があるが、才2表をよく考察してみると驚くべき事実が発見される。就取先不明の多いのはさおき、他の学科への再入学や官公庁学校法人等が多く、一般会社への進出が少い。しかし最近2~3年には染色・織物・化学の方面への就取が増加して来ている。これらは何を意味するか、それは皆さんの判断におまかせする。

語が少
数して
するに
学の先
化学家
れぞ精
活躍し
幸で現
病も今
会に親
ごが
空にこ
に幸を
後輩が
生・交
みなら
の、わ
して大
にか、
箱
我々
られた
新しい
もって
の結核
獨り
more
actual
nate
calle

話が少々変な方へ脱
 線してしまったが要
 するにわれら繊維化
 学の先輩は日本中の
 化学関係会社で、そ
 れぞれの持場持場で
 活躍していると云う
 事である。後輩諸元
 婦も今後どしどし社
 会に巣立っていくの
 だが、自己のみの繁
 栄にこだわらず、同
 じ学舎で学んだ先輩、

後輩がもつともつとより一層の親睦
 性・夜調性をもって繊維化学教室の
 みならず、われわれの線の母校のため、
 わが国繁栄の為、微力せら固結
 して大いに社会に貢献しようじやな
 いか。

オ 3 表 (昭和34.7.1現在)

業 種	卒業生	昭和28年	29年	30年	31年	32年	33年	34年	合計
官公庁学校法人等		9	11	13	11	7	8	8	67
官公庁学校職員等 高校中学教員 他学科への再入学		8	7	10	7	5	5	6	48
		1	3	2	3	0	1	2	12
		0	1	1	1	2	0	0	5
		0	0	0	0	0	2	0	2
法 人		0	0	0	0	0	2	0	2
蚕業・製糸会社		3	2	5	3	2	2	1	18
染色・織物会社		0	0	0	2	3	5	1	11
化学工業会社 <small>(油陽、三井、住友)</small>		0	0	0	0	2	5	3	10
商 社		2	1	1	1	3	4	0	12
家 業		2	0	0	0	2	2	0	6
その他		0	0	0	0	0	1	0	1
不 明		0	2	5	5	8	1	17	38
合 計		15	16	24	22	27	25	30	163

最後に、昭和31年4月から12月ま
 でインドネシア政府より派遣された
 3人のインドネシア留學生——アラ
 ウジン、スワンジ、ノギイマムミンタ
 ル)の3君が、繊維化学教室に学ん
 でいた事を後輩の為につけ加えておこう。

ナイロンの分解と重合及び紡糸

三回生 合成繊維実験班

結 言

我々3回生の合成繊維実験に、ナイロンの分解と重合、紡糸の問題が与えられた。我々は各班に分れて約1ヶ月間の実験を行い、オ1の班が見出した新しい知識をオ2の班が更に発展せしめると云う、見事なチーム・ワークをもって、興味ある実験成果を得、遂に最終目標たる、6.10, 6.6, ナイロンの紡糸に成功した。今迄の実験結果の概要を報告する。

獨ナイロンの発明者、W.H. Carothers の有名な polymer の定義、"It is more practical and useful (and also more consistent with actual usage) to define polymerization as any chemical combination of number of similar molecules to form a single molecules. A polymer then will be any compound that can be formed

by this process or degraded by the reverse process".

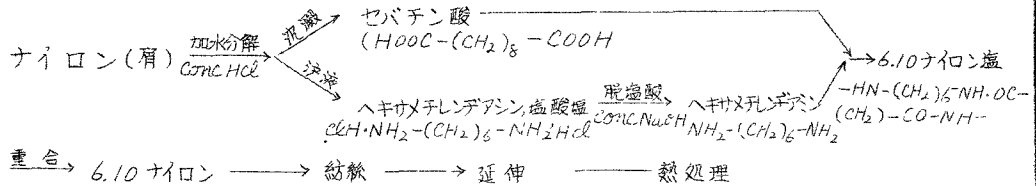
(W.H Carothers : Chemical Reviews 8 353-426 (1931))

を、彼の会社の Dupont 社のナイロンを原料として確認したのは興味の深いものであった。

実験

用いた原料は、Dupont 社の Zytel 3606 番、(電線用、組成未発表) および、輸入フルファツシヨン靴下(主成分 6.6 ナイロン)である、

実験操作は次の表の通り行った。



加水分解

Zytel 3606 の屑を 200g, 15% CONHCl を丸底フラスコに入れ、10 時間、加熱、加水分解を行う。冷却後、サランの浚布で浚過し浚液と沈澱に分離する。

セバチン酸の精製及び確認

上記の沈澱を多量の水(50倍以上)で再結晶を繰返し、活性炭で脱色すれば白色微粉未状の有機酸が得られる。その融点は 132°C で、酸価は 560、であつてセバチン酸 $\text{HOOC}-(\text{CH}_2)_8-\text{COOH}$ の融点 134.5°C 、酸価 554 に非常に近い故に、一応セバチン酸としておく。尚実験条件により結晶系、融点の少し異なる(約 2°C)酸が得られたが此の点に關して更に詳細なる研究が必要であらう。収量、理論値の 60%。

ヘキサメチレンジアミンの精製、確認

浚液を濃縮、乾固し、夫を再結晶する事により精製した。水による溶解度は無限に近いので之を利用出来なかつたが、エタノール、メタノール、及び含水アセトンに適当に溶解する事を見出し、再結晶に成功した。

1例をあげると次表の如し。

ヘキサメチレンジアミン 塩酸塩のエタノールによる溶解法

アルコールと水の割合		ジアミン塩酸塩の溶解性		再結晶操作
アルコール(部)	水(部)	常温(20°C)	沸点(80°C)	
100	0	難溶	可溶	容易
98	2	難溶	可溶	容易

90	10	一部可溶	可	溶	困	難
80	20	易	溶	可	溶	困

此の塩の98%エタノール中の溶解度は26°Cで約5.2%, 79°Cで87%である, 融点は248°C, N%は14%, Cl%は41%であつて, (ヘキサメチレンジアミンの塩酸塩の融点250°C, N% 14.8%, Cl% 37.5%) に近似している故其の塩であると確認する。収量72%

ヘキサメチレンジアミンの単離

精製ヘキサメチレンジアミン塩酸塩, 1 mol に対し30% NaOH, 3 mol 加えると, 直に食塩は下に沈澱し, 上部に油状のヘキサメチレンが分離して来る。之を分液漏斗でNaOH溶液と分ち, 真空蒸溜する。無色, 潮解性の結晶が得られ, 其の融点は39°Cで文献と一致する。

6.10 ナイロン塩の生成

等モルのヘキサメチレンジアミンとセバチン酸を夫々約3倍量の80%エタノールに溶解し, 徐々に両液を混合する。一晩放置すれば6.10 ナイロン塩が結晶して析出する。重合が好都合に行く為には二回以上再結晶が必要である。融点170°Cで文献170~172°Cとよく一致する。

重合, 紡糸, 延伸, 熱処理

6.10 ナイロン塩を試験管に入れ, 約1%の水を加え, オートクレーブに入れる。中の空気を炭酸ガスで置換し 加熱重合を行う。

第1次重合は圧力: 20 気圧 温度 280°C 時間: 5 hr, 第2次重合, 圧力, 常圧 温度 280°C, 時間: 12 hr, 得られた polymer は融点 209°C の強靱な白色固体である, 紡糸はキャンドル法を用う。延伸率は約4倍, 非常に透明度の良い強力な糸が得られた。熱処理は熱湯(100°C)で10分間煮沸した。重合度及び纖維試験については次の機会に報告する。

以上の結果より Zytel 3606 番のナイロンは其の組織の中に60%以上のヘキサメチレンジアミンとセバチン酸の含有する事は明らかである。

尚 6.6 ナイロンについても同様な成果を得, 更に 6 ナイロンについても実験中である。

批評

纖維化学工場において, 約又半年, 約又 200 程度紡糸して来た, Zytel 3606 番の組成決定は長い間の問題であつた。それ故私は少し不安を抱きつつも三回生の練習実験にこの問題を与えた。学生達は非常な熱心さをもつて此の問題をとり組み 徐々に困難を解決しながら以上の趣かしい成果を得た

事は実に長ばしい事である。只各人の実験値が各々少しづつ異なる事、又文献値と少しく背違する事は、未だ実験操作の未熟なる事を示している故今後大に修業しなくてはならない。

現在ナイロン工業は非常に大きく生長しつつある故、其のスクラップ回収の仕事も一つの大きな工業として取り上げられる可き時代に来ている事は、私の二年半の工場運営の経験より、確信をもって云い得る。然も現在日本に輸入されているヘキサメチレンジアミンは専らイタリーにおいてアメリカのナイロン屑から回収されたものである。現在我が国で此の回収工業を企図する場合、原料として一定品種のものが給されるならば、其の原料の価格製品の価格及び技術的にみて十分採算が取れるであろう。只現在のナイロン屑には各種のもの、例えば 6.6, 6.10, 6, 及び其の共重合のものが混合している故、其のモノマーの分離、再生が其の工業の成否の鍵となる。其の点に關しては再生の実験がより発展する事を切望する。

Kodel Corval

相宅研究室 山内啓司

繊維の世界も日進月歩であることにかわりはない。2, 3の新繊維さどックアップして紹介してみよう。

Kodel: Eastman Kodak社で発明されたポリエステル繊維で、分子構造はテリレンとは違ふものだといわれている。最大の特長はテリレンの欠点とされる毛玉のつきやすい点が改良された上にヒートセットせずとも寸法の安定した織物ができるようだ。200°C以上のアイロンにも安定というから耐熱性もかなりのものである。毛混、絨混の製品が

中心に出廻るのを見たい。

Corval: これは Courtaulds社より発表された纖維素分子の高に化学的架橋を行かせたものである。宣伝文句によるとスフよりも気高く暖かく、水につけても強いという。値段は1ポンド40セント(普通スフは3/ポンド)というから強カスフ並である。合繊混紡用であり、綿混紡用には *Topul* がある。



四面体と八面体の折紙模型について

町田研究室 小西 恒 男

序

化学同人による雑誌“化学”は化学を専攻する学生が誰でも一度は手にとって見、その誰もが我々学生にはあまりにも専門的で難解な内容を読みこなせずにおぼろげに出しているのが現状の様である。しかしこの“化学”も初期のもの即ち、1951~1953年頃迄のものは現在のものに比して非常に判りよい云わば化学の入門書風な内容になっている、私は夏休み頃の雨にまかせて1951年以來のものを、少しずつ読んでみたが初期のものには結構楽しめるものが多かった。ここに紹介するものは、1953年10月号化学が48~49にあるものであるが文献紹介と云うには少し貧弱すぎるかも知れない。しかし何もむずかしいものにばかり無理をして飛つく必要もないことと思う、本之（註：以下の文章は私が要約したもので“化学”そのまゝの文章ではない事をことわっておく）

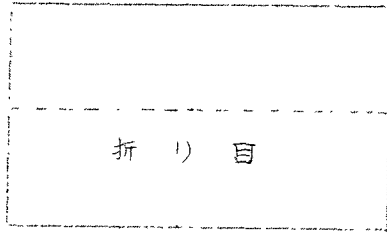
折紙は日本固有の手芸で、世界に誇るに足るものである。しかし従来一般に行われているのは、正方形の紙から出発するものゝせいでそこにおのずから出来上がったものに限界が生ずる正方形以外の種々な形から出発して見ると又色々な面白いものができる。以下に書くのは正六角形から出発して、正四面体と正八面体とを作る方法であるが、正四面体は、フアントホックの有機立体化学の核心であり、正八面体はラウエルの無機主体化学の基本である、有機、無機化学を学ぶ上に何かの役に立ち得るのではなからうか、現に正八面体が10個もあれば水礬土石 $Al(OH)_3$ やアスボール $Al_2O(OH)$ やもっと複雑な物質の結晶構造も手軽に組立てることが出来るのである。

(I) 正八面体の折り方（オノ図）

(1)(2)(3)の様に正六角形を切り、(4)の折り目で(5)の様に折り、(6)は一つの折り目(1)に二つの端(10)(11)を折り込め、裏がえして同様、(7)の上の端から息を吹き込めると正八面体になる。

マロファンで折れば天然ダイヤモンドや明ばん結晶 $KAl(SO_4)_2 \cdot 12H_2O$ 紫や緑のマロファンなら夫々クロム明ばん $KCr(SO_4)_2 \cdot 12H_2O$ や螢石 CuF_2

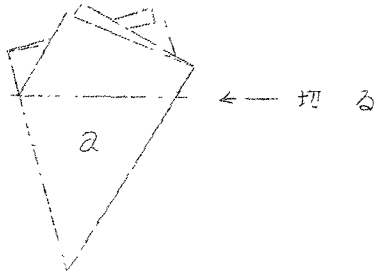
を思わせる。黒い正八面体は磁鉄鉱 Fe_3O_4 になる。



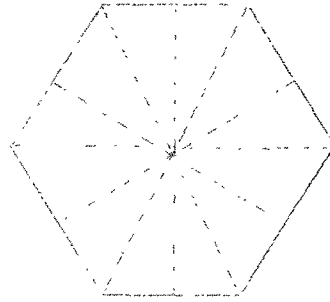
(1)



(2)

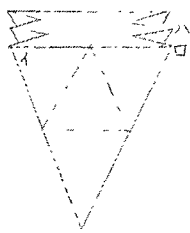


(3)

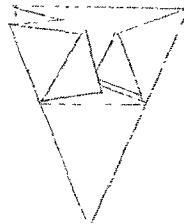


(4)

空気を入れてふくらませる ↓



(5)



(6)



(オ 1 図)

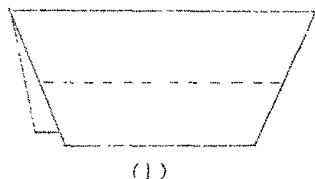
(1)
 2の
 2を
 はさ
 襷
 テト
 子
 P.
 らん

〔Ⅱ〕正四面体の折り方 (才 2 図)

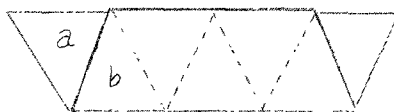
正六角形を(1)の様に半分に折り更に二つ折りにして(2)の様な折り目をつける。(3)でaをbの下に折り込みcの下を二つに折って(4)にする。dをeを重ね、bをfの二枚の間にはさむと(5)になる。c'とcの間にg'をささみ込むと、頑丈な正四面体が出来る。

褐色のセロファンで折ったものは閃亜鉛、鉍 PbS を黒色の紙を折れば、テトラヘドライト Cu_3SbS_3 を思わせる。

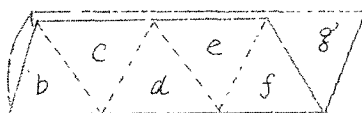
折紙については以上である。なお余談であるが 1952年の化学8月号 P.39 に岩崎先生の学生時代の写真がのっている。入手出来たら一度 ざらんになって見ては如何。



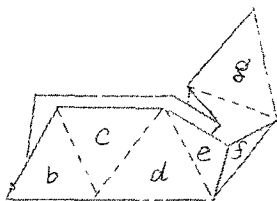
(1)



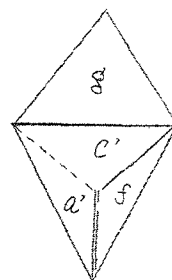
(2)



(3)



(4)



(5)

(才 2 図)

積分反応

岩崎研究室

(その一)

化学反応を一定温度で一定時間反応せしめると一定の反応進行度が得られる。例えば一次反応において、初濃度を a 、反応時間 x 分後の反応量を x 、反応速度恒数を k で表わすと、反応進行度は

$$\ln \left(\frac{a}{a-x} \right) = kx \text{ ----- (1)}$$

で表わされる。

しかしながら実際上では反応中の温度を規定通り一定に保てない場合もあり、又必要上一定の温度変化経過をたどらねばならない場合もあり、その温度経過を再現しにくい場合も少なくない。この様な場合、 k は温度の函数であり、温度は x の函数であるから、 k は x の函数であると考え、一次反応ならば

$$\ln \frac{a}{a-x} = \int_0^x k dx \text{ ----- (2)}$$

によって計算すべきであると考え、これを“積分反応”と名付けた。これは工業上にも誠に重大な利益のある便利なものであると信ずる。不思議な事にこの様な事を従来の人々は考えていない様である。(2)式が成立する事は当然であると考え得る。そこでまず念のためこの式が成立するという事の実験的証明から初めたのである。

実験的証明の為にまず最も典型的な一次反応である醋酸エチル水溶液の塩酸を触媒とした酸化反応を選んだ、これが一次反応に従うこと及びその際の速度恒数はいずれも *Landselt* の文献にも記載してある。それ故、二種の温度における反応速度恒数から *A. Arrhenius* の式に当てはめ連立方程式を解いて活性化熱 (E)及び頻度因子 (A)を求めた。

$$\ln k = \ln A + \frac{-E}{RT} \text{ ----- (3)}$$

この結果から温度 T の函数としての k が分り、従って任意の温度 T における反応速度恒数 k が分る。

次に温度 T_1 から反応を開始して任意の温度変化をたどって温度 T_2 に至らしめる反応を行い、小時間毎にその温度を記録し、又適当時間毎に反応液を採取滴定してその進行度を測定した、それから算出した $\ln \left(\frac{a}{a-x} \right)$ が $\int_0^x k dx$ と一致することを確認したのである。こうして (2)式は充分

に正しいという事が分ったのである。

酪酸工于ルの25°C ± 0.1°Cにおける実験の結果算出した反応速度恒数は平均59.68 × 10⁻⁵で Landolt のそれの60.15 × 10⁻⁵とよく一致する。又35°C ± 0.1°C のkは149.1 × 10⁻⁵であった。これら古典的な恒温反応によって得た結果から、Arrhenius の式を用いて求められた活性化熱 (E) 及び頻度因子 (A) は、E = 16.720 kcal/mol, A = 10^{9.0313} min⁻¹ で、従って関係式は

$$\log k = 9.0313 - \frac{3654.3}{T}$$

となる事が分った。

次に、同じ反応を25°C ~ 35°C で反応中に温度が任意に変化する様に行い、上記の結果を用いて積分反応式 $\ln \frac{a}{a-x} = \int_0^x k dz$ が実験的に正しい事を確かめた。この際、40, 60, 80, 100 分後に試料を採取し滴定し、その実験値及び計算値は表1及び表2の通りである。

表 1

時間 z (min)	温 (°C)	度 (°K)	k × 10 ⁵ (min ⁻¹)	$\int k dz (\times 100)$	滴定量 V (ml)	$\ln \frac{V_{\infty} - V_0}{V_{\infty} - V_t}$ (x/100)
0	25.20	298.36	60.73			
5	25.90	299.06	64.86			
10	26.60	299.76	69.28			
15	27.20	300.36	73.41			
20	27.60	300.76	76.05			
25	27.85	301.01	77.84			
30	28.15	301.31	80.04			
35	28.40	301.56	81.91			
40	28.70	301.86	84.22	2.478	11.53	2.944
45	29.00	302.16	86.58			
50	29.30	302.46	89.00			
55	29.70	302.86	92.34			
60	30.25	303.41	93.89	4.764	12.29	4.646
65	30.90	304.06	103.00			
70	31.50	304.66	108.70			
75	32.00	305.16	113.90			
80	32.60	305.76	120.10	6.946	13.19	6.693
85	33.10	306.26	125.70			
90	33.65	306.81	132.00			
95	34.15	307.31	138.10			
100	34.65	307.81	144.30	9.584	14.36	9.430
∞					56.51	

オ 2 表

時 間 Z (min)	分析値(実験値) $X = \left(\ln \frac{V_{\infty} - V_0}{V_{\infty} - V_Z} \right) \times 10^2$	計算値(理論値) $Y = \left(\int_0^Z k dt \right) \times 10^2$	誤 差 (%) $\frac{Y - X}{X} \times 100$
4 0	2.944	2.978	+ 1.1
6 0	4.646	4.764	+ 2.5
8 0	6.693	6.946	+ 3.7
10 0	9.430	9.584	+ 1.6

ここで積分反応式の右辺の計算は、Simpsonの法測による数値積分をすれば容易に出来る。即ち、 Y が奇数個の場合は Simpson $\frac{1}{3}$ law

$$S = \frac{1}{3} h (y_1 + 4y_2 + y_3) \quad \text{但し } h: \lambda \text{の 間 隔}$$

$$S = \frac{1}{3} h (y_1 + 4y_2 + 2y_3 + 4y_4 + 2y_5 + 4y_6 + y_7)$$

が、 Y が偶数個の場合は Simpson $\frac{3}{8}$ law が

$$S = \frac{3}{8} h (y_1 + 3y_2 + 3y_3 + y_4)$$

が適用される。(オ1表 オ2表)

(その2)

従来、反応の活性化熱を求めるには、少くとも2つの異なる恒温中において反応を行い、それら反応速度恒数を Arrhenius の式に入れ、連立方程式を解いて活性化熱及び頻度因子を計算するのが古典的常法であった。しかしながら先に述べた積分反応を使用すれば、今まで考えられなかった全く新しい方法で E , A を求める事が出来、今までの様な困難や不便のない容易な大いに意味のあるものと考えられる。

方法としては、温度経過を異にする少くとも2つの実験を行えばよいのであって、今簡単な為一次反応の場合について説明すると、次式の成立する事は前述した通りである。

$$\ln \frac{a}{a-x_1} = \int_I k dz = \int_I A e^{-E/RT} dz = A \int_I e^{-E/RT} dz \quad \dots\dots (1)$$

$$\ln \frac{a}{a-x_2} = \int_{II} k dz = \int_{II} A e^{-E/RT} dz = A \int_{II} e^{-E/RT} dz \quad \dots\dots (2)$$

(1)(2)式を辺々相除すれば、次の様になる。

$$\frac{\ln \frac{a}{a-x_1}}{\ln \frac{a}{a-x_2}} = \frac{\int_I e^{-E/RT} dz}{\int_{II} e^{-E/RT} dz} = \phi(E) = C \quad \dots\dots (3)$$

(3)式の左辺は実験によって(滴定、分析)定まる一つの既知数であって一定値とにおいてよい、中辺の分母子は E 及び温度経過が既知ならば決定する値である。従って中辺は要するに E の函数 $\phi(E)$ であって、これは E の一意的函数である事は間違いないが、恐しく複雑な形であって、 $\phi(E) = C$ を解

くことは普通の数学では困難である。しかしながら、岩崎法の所謂二次曲線を利用する試算法によれば比較的簡単にこれを解くことが出来る。Eが分れば(1)(2)式に代入してAが計算できる。

一例をあげ説明すると、前述の醋酸エチルの酸化反応の温度変化をした実験においてその反応の温度経過を記録し、又20~30分毎に試料を採取し、滴定した各部分を組合せた結果はオ3表の通りである。尚同様の実験を数回繰り返してE及びAを求めた結果はオ4表の通りである。それらに対比して古典的方法で求めたE、Aの値及びそれらの値を用いて積分反応式を計算したときの実験値と計算値の誤差を合せて表示した結果を見ても、古典的方法に比べて少しも遜色がない事がわかるだろう。

オ 3 表

組合せ	$\phi(E) = \frac{\int_{z_1}^{z_2} e^{-E/RT} dz}{\int_0^{z_2} e^{-E/RT} dz}$			$C = \frac{\ln \frac{V_{\infty}-V_0}{V_{\infty}-V_{z1}}}{\ln \frac{V_{\infty}-V_1}{V_{\infty}-V_{z2}}}$	$\phi(E) = C$ より解いたE cal/mol
	$E_1 = 14000$	$E_2 = 15500$	$E_3 = 18500$		
II/I	1.583	1.593	1.613	1.578	13200
III/I	2.269	2.304	2.371	2.273	14300
IV/I	3.073	3.150	3.313	3.255	17510
II/II	1.432	1.445	1.470	1.440	15000
IV/II	1.942	1.975	2.053	2.032	18800
IV/III	1.355	1.367	1.391	1.431	21600

最右欄の平均： $\bar{E} = 16700$
このEの値より求めた頻度因子： $A = 10^{9.0060}$

(註) 但しI, II, III, IVは反応時間40分, 60分, 80分, 100分を意味する記号である。

例えばII/Iは $\phi(E) = \frac{\int_{z_1}^{z_2} e^{-E/RT} dz}{\int_0^{z_2} e^{-E/RT} dz}$ を意味する。

オ 4 表

実験番号	活性化熱 E (cal/mol)	頻度因子 A (min ⁻¹)	積分反応の実験値と計算値との誤差	
			左の欄のE及Aを用いた場合	古典的方法によるE及Aを用いた場合
我々の新しい方法に依り求めた値	実験1	$10^{9.0060}$	0.8%	2.2%
	実験2	$10^{9.0816}$	1.6%	1.0%
	実験3	$10^{10.0286}$	0.9%	1.5%
	実験4	$10^{8.1057}$	3.7%	4.6%
	実験5	$10^{9.2164}$	1.2%	2.3%
実験1~5の平均		$10^{9.1076}$		
(備考) 古典的方法に依り恒温反応から求めた値		$10^{9.0313}$		

編集後記

発行が遅れたのは残念です。今号は前号より質的に向上したと云えます。これは機関誌の発展過程として高く評価されるべきです。原稿も多く集りました。次の原稿は次号に譲らせていただきます。

Kinetics of Amida's lot

by J. Dabo

映画鑑賞「老人と海」 三辻 勝

「君、スキーをやらないか」 松風みどり

朝鮮人帰国問題について 朱焮 燦

茶房にて 鈴木溪太郎

ドイツからの便り 吉本克己氏

学園に於けるさまざま 荻野孝雄

な思想の共存について

機関誌編集部で試みた学生懇談会はこの誌の目的に接近する有効な芽生えとして大切に育てなければなりません。本質的なつながりのために何かを試み何かを得なければならぬと思います。

機関誌がどのように読まれ消化されているか、それがどのような反応として現われるかを知ることは編集

部の大きな要素がありますが現在のところそれが非常に曖昧であり同時に集った原稿からその反応を究明し得ないようです。

最後にこの編集には一つの方角転換が意図されていますが、あまりすっきりしなかった様です。

(編集子)

X X X

印刷日 1959年 2月 5日

発行日 1959年 2月10日

発行 京工繊大繊維化学科学生

編集 繊維化学科学生機関誌
編集部

編集部代表 荻野孝雄
